

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

寮歌作曲家濱徳太郎の西洋音楽受容の諸相：  
旧制松本高等学校及び音楽関連収集資料からの考察

|       |                                                                                                               |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-06-21<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 下道, 郁子<br>メールアドレス:<br>所属:            |
| URL   | <a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1133">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1133</a> |

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# 寮歌作曲家濱徳太郎の西洋音楽受容の諸相

## ——旧制松本高等学校及び音楽関連収集資料からの考察——

下道郁子

### はじめに

近代日本を担う人材育成を目的に設置された旧制高等学校は、多くの「教養ある紳士」を世に送り出した。全国から就学年齢である16-18歳の男子の1%にも満たないエリート青年を集め、教養教育を理念とした旧制高等学校では、独特の学生文化が花開いた。旧制高等学校はエリート教育、大学への準備教育、教養教育という点で、ドイツのギムナジウム、イギリスのパブリックスクール、そしてアメリカのリベラルアーツ型カレッジを模範とし、外国人教師による教育を行った。よって旧制高等学校生は、当時としては最先端の西洋文化を受容する環境と能力を兼ね備えていたと言える。中でも寮歌の作曲家として活躍した学生達は、西洋音楽の知識や演奏技術に秀でていた。濱徳太郎(1901-1975)は旧制松本高等学校の一期生で、「春寂寥」をはじめ同校の代表的な寮歌を9曲も作曲した人物である。

寮歌は一般に、音楽面よりも歌詞が注目されるため、作詞をした学生に関する研究はいくつかある<sup>1</sup>。第一高等学校「嗚呼玉杯」の矢野勘治(1882-1961)、北海道大学予科「都ぞ弥生」の横山芳介(1893-1938)、第三高等学校「紅もゆる」の澤村胡夷(1884-1930)は、帝国大学卒業後のキャリアや業績に関して多くの情報があり、また人物像の研究もある。一方で、作曲をした学生については、作詞をした学生に比べて情報が少ない。卒業後は理系の専門職となる者も多く、彼らの音楽との関わりは、周囲の人々の思い出から推測するしか術がないこともある。

しかし「春寂寥」の作曲者、濱徳太郎は、専門とした美学と建築、及び趣味のクラシックカーのコレクション等、多彩な文化人としてその名を知られている。昨年、濱徳太郎の遺族から旧制高等学校記念館に、音楽関連資料が寄贈された。資料は楽譜だけでも約120点あまり、

---

1 例えば矢野勘治 六十年・夢心地の感慨(第一高等学校・『嗚呼玉杯』の作詞)『資料集成 旧制高等学校全書 第六巻 生活・教養編』p.330  
海堀 昶「澤村胡夷作詞の歌 新発見 臺灣警察歌」『会報』97号 p.10  
樋口桜五「『都ぞ弥生』のころ」『都ぞ弥生』1974 pp.30-42 等

そのうち手書きによる写譜が約 60 点以上ある。本稿では、この濱徳太郎を一事例として、旧制高等学校の教育を受けた戦前の教養人の西洋音楽受容の諸相を、明らかにしていく。

## 1 生涯

濱徳太郎の幼少時については、長男素紀氏が残した文章から、知ることができる。濱徳太郎は明治 34 年（1901）に長野県岡谷市の士族の家に生まれた。濱家は不動産業や金融業を営む傍ら、郵便局をやっていた。徳太郎の父は、村で最初に洋服を着、自転車にのり、諏訪湖でスケートをしたという新しい物好きであったという。相場で失敗したのを機に新天地東京へ移り住み、濱徳太郎を慶応の幼稚舎に入れている。娘達も私立の女学校に、末娘は東京音楽学校に通わせた。教育熱心で経済的にも余裕がある、ハイカラで贅沢な家庭であったと思われる。旧制第三校等学校の寮歌「琵琶湖周航の歌」の作詞者小口太郎は遠縁にあたる。

慶応普通部から故郷の旧制諏訪中学校（現長野県立諏訪清陵高等学校）に転入し 1 年半を過ごした後、新設された松本高等学校に進学した。理科乙類のクラスで医学薬学系の進学を目指した授業科目で学んでいたが、自然科学に興味があったのではなく、数学と物理が苦手という理由からのようであった。高校時代に建築に興味を持ち始めるが、工学系の建築学科には進学せず、文学部哲学科の美学美術史に進学している。大学時代は専門の勉強に熱心で、端正に図を描きながら熱心にメモをとった講義ノートが残されている。卒業課題では、独創的な住宅を設計、石膏模型も制作している。

卒業後は帝国美術学校（現武蔵野美術大学）の英語の講座で教鞭をとり、昭和 2 年（1927）に結婚、上落合に住む。借りた住まいは、前衛の小説家、劇作家、演出家、画家として知られる村山知義（1901-1977）のアトリエとして設計された、住居というよりは造形物のような家であった。高額の家賃を払い、アメリカ製のバイクに乗るという、講師の給料には見合わない生活を可能にしたのは、妻富士子の財力であったという。その後、現在の吉祥寺に居を構える。この新居は実業家岩崎弥太郎が東京西部の武蔵野町に所有していた広大な土地に成蹊学園を創設した後、残りをアメリカ製のプレハブ住宅付き宅地として売り出したものだった。

学校からの辞令で昭和 7 年（1932）に妻子を伴いヨーロッパへ外遊する。この時、ベルリン高等音楽院に留学する諸井三郎と同船であった。ベルリンには一年半滞在し、ロンドン、パリ、ミュンヘンに移住し、各地の博物館、美術館、自動車ショー等を見て回った。帰国直前には、ロンドンでレーシング・スポーツカーを購入している。

昭和 10 年（1935）に帰国後は、帝国美術学校の助教授となり、図案工芸科の工業美術とドイツ語を担当した。特に機会美の講義では、外遊中に購入した自動車、飛行機の部品や電機製品等を教材にした斬新な授業を行った。昭和 13 年（1938）からは日本大学芸術科でも講師として教鞭をとる。戦後、帝国美術学校は造形美術学園を経て武蔵野美術学校へと校名を変更し

カリキュラムを一新、これに伴い工芸史を担当するようになる。

昭和 19 年（1944）にブガッティ（Bugatti）の車入手し、クラシックカーのコレクションを始める。昭和 30 年（1956）に日本クラシックカークラブを設立し、戦前型車がスクラップされるのを救済した。自動車評論家の小林彰太郎（1929-2013）にも影響を与えたと言われる。

## 2 音楽的環境

濱徳太郎は何がきっかけで、またどのようにして西洋音楽に傾倒していったのだろうか。長男素紀は「不可解」と述べている。母親は三味線を習っていて、親戚が訪ねた時には披露するような腕前だったが、出身地の岡谷で西洋音楽の演奏会が頻繁にあったわけでもなく、濱徳太郎の日記の中にも音楽に関する記述はない。

素紀の母、つまり濱徳太郎の妻富士子はミッシェル・エルマン（Mikhail Saulovich Misha Elman 1891-1967）のヴァイオリン、アルフレッド・コルトー（Alfred Denis Cortot 1877-1962）のショパン（Frédéric François Chopin 1891-1967）、パデルフスキー（Ignacy Jan paderewski Cortot 1860-1941）のピアノ、シャリピアン（Fyodor Ivanovich Chaliapin 1809-1849）の歌等の小品のレコードを所有していた。富士子は濱徳太郎の妹鈴子の雙葉高等女学校の同級生であった。旧姓森村富士子は森村財閥の 6 代目森村市左衛門の末娘で、16 歳で父と死別した後、姉の嫁ぎ先で世話になっていた。当時の新傾向の婦人雑誌や文学書を良く読んだようで、蔵書の中には大正時代のダダイスト詩人高橋新吉（1901-1987）の詩集があった。音楽が大好きでピアノを習っていた。

濱徳太郎と富士子は恋愛結婚で、結婚前に長期に渡り交換日記を書いている。今回の寄贈資料にこの日記が含まれていたが、この中には音楽に関する記述が時々でてくる。日記の大半は、当人同士の意志に反して周囲、特に富士子の親がわりである姉夫婦に結婚を反対されていることに関する苦悩や想いが綴られている。音楽に傾倒し、自由人で留年を繰り返す、未だ帝国大学の一学生であった徳太郎との結婚が、許し難いものであったことは容易に想像できる。しかし、そんな中でも、徳太郎が鑑賞したクラシックの作品名のメモや、富士子がピアノやオルガンを弾いたといった記述があり、音楽が二人をつないだ一要素になっていたことが伝わってくる。また富士子が当時としてはかなり西洋音楽の素養を持ち、享受する環境にあったことも伺われる。

末の妹その子は東京音楽学校のピアノ科に入学しているが、これも長男素紀によると不可解なことだという。どこで練習をしていたのか、どの程度の技量だったのかも謎という。その子は濱徳太郎の松本高等学校時代の友人と結婚している。厚生省をたちあげる役人であった夫について、ベルリンへ留学した。帰国後は声楽家四家文子（1906-1981）の専属伴奏者として活躍した。

素紀の記憶によると、徳太郎の音楽の趣味はオーソドックスで、バッハ（J.S. Bach 1685-1750）やベートーヴェン（L.V. Beethoven 1770-1827）の論理的な構成を評価し、チャイコフスキー（P.I. Tchaikovsky 1840-1893）やドヴォルザーク（A.L. Dvořák 1841-1904）の叙情性を愛し、チャイコフスキーの交響曲第6番〈悲愴〉、ヴァイオリン協奏曲、〈四季〉の「秋の歌」や「悲歌」を好んで聴いていた。その他、ショパン、ドビュッシー（C.A. Debussy 1862-1918）、ラベル（M. Ravel 1875-1937）、アルベニス（I. Albéniz 1860-1909）、ファリア（M. Falla 1876-1946）、イタリアオペラについて語っていたという。ストラビンスキー（I. Stravinsky 1882-1971）の〈火の鳥〉のレコードも所有していた。

### 3 松本高等学校

濱徳太郎が青春時代を過ごし、音楽部で大活躍をした松本高等学校は大正8年（1919）に創設された。実は松本高等学校は明治40年（1911）に第九高等学校として内定が決まったものの延期になっていた。よって大正7年の高等学校令改正の翌年に初の地名スクール4校の一つとして長野県松本市に設立された松本高等学校は、松本市民の長年の悲願の実現であった。

地名スクールは明治時代に設置されたナンバークールへの反省と改革を背景に、新しい時代に相応した教育理念と内容でスタートした。大正デモクラシーと呼ばれるこの時期は、資本主義の躍進により、帝国大学の卒業生の実業界への就職者が増大したが、高等学校の数は少なく、大量の知識人の養成が急務となっていた。このような世情を反映し、大正7年（1918）の高等学校令改正には高等教育機関の増設が盛り込まれ、大正15年（1926）までに官立17校と公立2校の増設が実施された。これらの高等学校は地名スクールと呼ばれ、明治時代に設置された第八高等学校までのナンバークールとは、その教育理念や内容は異なっていた。例えば、従来の帝国大学の予備教育の性格を脱して男子の高等普通教育を完成する機関となり、個人の能力を育成するという傾向や、都会的な気質が加味された校風が生まれるようになった。

濱徳太郎はこの新しい高等学校の一回生である。大正8年の9月11日に、東京外国語学校から任ぜられた初代校長茨木清次郎のもと、160人が入学、松本中学校（現県立松本深志高等学校）内の仮教室で授業を開始した。1学年の編成は文科甲類、文科乙類、理科甲類、理科乙の4学級であった。文理科とも甲類は第一外国語が英語、乙類は第一外国語が独語である。徳太郎は理科乙類であった。

大正9年（1920）1月には校友会が組織され、庶務部、文芸部、講演部、音楽部、山岳部、競争部、柔道部、剣道部、庭球部、水泳部、氷滑部、野球部が置かれ活動を開始した。濱徳太郎は音楽部に入部して、活発な音楽活動を行う。この年の9月には学寮が完成、思誠寮と命名される。歓迎ストームを皮切りに、運動会、寮歌練習等諸行事が始まった。寮歌「夕暮るる」「春寂寥」は寮開設とともに生まれた。ともに徳太郎の作曲である。徳太郎は音楽部で活躍し、

寮歌の作曲に情熱を注ぎ、各学年を重複して6年かけて卒業している。そんな徳太郎の高等学校生活はどのようなものだったのだろうか。同級生の記憶によると、徳太郎は作曲の天才で、授業をさぼり、オルガンばかり弾いていたという。思誠寮が完成した年の11月に第一回の記念祭が開催され、寮歌の歌詞が公募され、作曲が徳太郎に依頼された。初めて寮歌が生まれた時、寮生達は3日間の猛練習をした<sup>2</sup>。

## 4 音楽部での活躍

音楽部は校友会創立の日から目覚ましい活動を開始した。初代部長は物理の藤村信次教授で、ドイツ語のパウエル講師が指導にあたった。パウエル講師はベルリン高等音楽院出身の音楽家であった。日本の音楽学校で声楽を教える目的で来日したが、上手くいかず、松本高等学校でドイツ語を教えながら、音楽部の指導に情熱を傾けたようである。徳太郎は音楽部の部員として、鍵盤楽器の奏者、作曲家として活躍した。その他ピアノの片山尚、10名のマンドリングループ、弦楽四重奏の4人組、30名からなる合唱隊という大所帯で、水準の高い演奏を行っていた。当初から邦楽を避け、洋楽の普及を方針としていた。

創立当初から活発な演奏会を行った。徳太郎が在学中に開催された演奏会の内、資料から確認がとれたものを記す。大正9年(1910)2月 公会堂で校友会創立の祝賀コーラス合唱、同年11月第1回音楽会を小学校筑摩部音楽室で開く。この音楽会については「楽聖ベートーヴェンの五十年祭に当たり、私共大いに刺激される所あって開いたものであります」<sup>3</sup>という音楽部の報告がある。翌大正10年(1911)秋には松本中学校の講堂を借りて、創立第1回の公開演奏会の開催、大正11年(1912)には、新装となった松本高等学校の講堂で落成記念演奏会を開き、同年に第3回演奏会を松本高校の講堂で開催する。演奏会のプログラムは表1～3に示す。以後定期演奏会は松本高等学校の講堂で開催される。会場となった講堂は、着飾った夫人や令嬢達が華やいだ雰囲気がただよっていたという。

徳太郎はピアノと作曲、片山尚はピアノ独奏者として活躍している。片山は「空行く雁」等寮歌数曲を作曲した人物である。寮歌作曲学生の二人が、専門的な西洋音楽の知識や演奏技術を持っていたことがわかる。またパウエル講師、藤村教授は指導者としてだけではなく、歌手としても活躍している。ヴァイオリン独奏は松本高女の石野巖教諭が演奏している。マンドリン合奏が盛んであり、合唱は各部員の専門実技に関わらず、全員で行っている。不思議なことに、大正9年(1910)のプログラムにあったオルガン演奏が翌年以降なくなって、ピアノのみになっている。鍵盤楽器がオルガンからピアノへと移行した過渡期とも考えられる。いずれに

---

2 郷土出版編集部 『旧制松本高校青春期』 pp.363-364

3 『校友会雑誌』 大正10年 p.8

せよ濱徳太郎は当初から、寮歌の作曲を依頼されただけではなく、音楽専門家として頼りにされ、活躍していたことがわかる。

表 1 第 1 回演奏会プログラム（大正 9 年 11 月）

『校友会雑誌』第 3 号 大正 10 年 p.8 から作成 表記はそのまま

| 曲目                            | 作曲者                | 演奏者          |
|-------------------------------|--------------------|--------------|
| 第五シンフォニー<br>Menuet in G major | ベートーヴェン<br>ベートーヴェン | 蓄音機演奏        |
| Die Ehre Gottes aus der natur | ベートーヴェン            | 部員合唱         |
| Sonata op.49 no.2             | ベートーヴェン            | ピアノ独奏 片山尚    |
| 松葉落つる<br>Merry widow          | ベートーヴェン<br>ベートーヴェン | 低音独唱 藤村信次    |
| 春の歌                           | メンデルスゾーン           | マンドリン独奏 入江卓一 |
| 歌劇ボッカチオ                       | Suppe              | 次中音独唱 近藤道六   |
| 楽しき農夫                         | シューマン              | オルガン独奏 青柳道夫  |
| 歌劇「椿姫」                        | Verdi              | 次中音独唱 野村豊二   |
| Traumeiei                     | シューマン              | ヴァオリン 独奏     |
| 楽しき我が家                        |                    | 低音独唱 鈴木勇     |
| Sonata in Fmajor (No.4)       | モツアルト              | ピアノ独奏 濱徳太郎   |
| 雨にぬれて                         | 井上武士               | 次中音独唱 等々力氏   |
| 春興                            | Moxxinghi          | 合唱 部員        |
| 騎兵の行進                         |                    | オルガン独奏 井出茂太氏 |

表 2 創立第 1 回公開演奏会プログラム（大正 10 年秋）

『われらの青春ここにありき：松本高等学校』p.67 を参考に作成 表記はそのまま

| 曲目      | 作曲者      | 演奏者                                     |
|---------|----------|-----------------------------------------|
| 菩提樹     | シューベルト   | 指揮 バウエル<br>合唱 濱徳太郎、片山尚、井上泰忠、斉藤利忠（音楽部員）  |
| 春の歌     | メンデルスゾーン | ピアノ 青柳道夫、マンドリン 入江七平（有志学生）               |
| ウィリアムテル | ロッシーニ    |                                         |
| オーソレミオ  |          | 独唱 柿原又男、マンドリン 入江七平（有志学生）<br>※独唱者酩酊のため中止 |
| サンタルチア  |          | バウエル講師と藤村教授の二重唱                         |
| 不明      |          | 石野講師（松本高女教諭）のヴァイオリン独奏                   |

表3 第3回演奏会プログラム（大正11年1月）

『校友会雑誌』第5号 大正12年 pp.76-77 から作成 表記はそのまま

| 曲目                          | 作曲者                       | 演奏者                     |
|-----------------------------|---------------------------|-------------------------|
| 校歌合唱                        | 作曲 山田耕筰<br>作詞 土井晩翠        | 部員一同                    |
| 『高きかな、み空』                   | ヘンデル                      | コーラス部員                  |
| へ調ソナティネ                     | ベートーヴェン                   | ピアノ獨奏 片山尚               |
| セレナーデ<br>第一狂想曲              | ドウリゴ<br>アリエンツォー           | マンドリン四部合奏               |
| 垣根のばら<br>逝く年の歌              | ヴェルネル<br>シュルツ             | 男声四部                    |
| ガボット                        | マルティニー                    | ピアノ連弾 片山、宮坂             |
| クリスマスの歌<br>? 都              |                           | 部員                      |
| 組曲エスパクノーレ                   | グランツィアニ、<br>ワルテル          | マンドリンオーケストラ 部員          |
| 海辺にて<br>さらば                 | シューベルト<br>トステイ            | 低音獨唱 藤村教授               |
|                             |                           | ヴァオリンピアノ合奏<br>石野巖氏 濱徳太郎 |
| さすらい人の夜の唄<br>春の信仰<br>わがいとしの | シューベルト<br>シューベルト<br>デオルダニ | 次低音獨唱 ヴァウエル教授           |

## 5 寮歌作曲家としての作風－短調とロマンティシズムへの嗜好

音楽愛好家、及び収集家であった濱徳太郎であるが、寮歌作曲家としての彼の作風はどのようなものであったのだろうか。アルプス連邦に囲まれた海拔600メートルの高原に建つ松本高等学校の寮歌には自然を讃え、青春を謳歌した内容が多い。明治時代のナンバースクールの寮歌と対比すると、勇壮果敢な軍国調のものは影を潜め、ロマンティシズムが出現している。これは歌詞だけではなく、音楽の面にも投影されている。

初期に9曲もの寮歌を作曲した徳太郎が、この作風の礎を築いたことは疑うまでもない。松本高等学校寮歌の研究家である同窓生宇都宮新（宇都：2003）は、第一回生の濱徳太郎と第二回生の片山尚の存在が「松高寮歌にとって僥倖であった」と述べ、徳太郎は短調派、片山は長調派と分類している。

片山尚は大正9年（1920）に「暁つぐる」（ト長調）「空ゆく雁」（ハ長調）、大正10年（1921）に「嗚呼青春」（二長調）大正11年に「羽音も高き」（ト長調）、大正13年（1924）に「青春の概」（ト長調）と合計4曲、いずれも長調の寮歌を作曲している。濱徳太郎作曲の寮歌は表4に掲げる。

表 4 濱濱徳太郎作曲の思誠寮寮歌一覧

| 題名         | 作曲年     | 調性   | 作詞者        |
|------------|---------|------|------------|
| 夕暮るる       | 大正 9 年  | イ短調  | 1 文甲 工藤友恵  |
| 春寂寥        | 大正 9 年  | ハ短調  | 1 文乙 吉田実   |
| 雲にうそぶく     | 大正 10 年 | 変ロ長調 | 3 文甲 福田美亮  |
| 冷霧飛来し      | 大正 11 年 | ト短調  | 3 文乙 加藤信彦  |
| 若き望み       | 大正 12 年 | イ長調  | 4 文乙 小島信雄  |
| 山もろともに     | 大正 13 年 | 変ロ長調 | 5 文乙 多々良勝  |
| 戦いの歌       | 大正 13 年 | ト長調  | 4 文甲 仁井田隆  |
| 新なる生の歌     | 大正 14 年 | ロ長調  | 4 文甲 仁井田隆  |
| 若人は誠を愛するの歌 | 昭和 5 年  | ニ短調  | 11 文乙 北島正元 |

徳太郎は寮歌作曲への思いを次のように語っている<sup>4</sup>。

私は人づきあいがわるいというのか、いつも自分のからに立てこもって、孤独でもなく、孤独にも耐えられないのに、いつも孤独の思いをたのしもうとしているような永い松本時代を送ってしまった。そういう私に寮歌がしばしば与えてくれたものは、私を孤独な迷走から引き出し、人と相識ることのよろこびを教えてくれたことある。

濱徳太郎にとって寮歌を作曲することは、孤独な自分を解放し、人とのつながりを喜びと感じる自分の発見でもあった。明治時代の寮歌作曲学生達の思いをしる手掛かりはほとんどないが、作曲者の意図や想いという面でも、新しい時代となったと言えよう。

## 6 寮歌第一号「夕暮るる」の作曲過程

思誠寮ができた大正 9 年（1920）の秋、全校生徒の熱望から寮で歌詞が募集され、寮歌二篇と応援歌三篇が選ばれた。音楽部に作曲が依頼され濱徳太郎は寮歌を受け持った。「夕暮るる」の作詞をした工藤友恵は寮歌第一号誕生の様子を次のように記している<sup>5</sup>。

大正九年の秋のある日、よく晴れた午後だった。新築校舎の一室で、作曲者浜濱徳太郎君（4 理乙）のピアノを囲んだ数人が、感激の涙にむせびながら初めて持つ借物でない寮歌のメロディに聴き入っていた。

松本高等学校初めての寮歌「夕暮るる」が披露された時だ。この情景は今も鮮やかにわ

4 われらの青春ここにありき編集委員会 『われらの青春ここにありき：松本高等学校』 p.63

5 前掲書 p.63

が眼前に残る。

工藤はさらに前年に松本高等学校が松本中学校の間借りで発足し、何もかもが借り物であった中、寮歌が第一高等学校を始めとする他校の寮歌であったのは屈辱であったとも述べている。一方、作曲を担当した濱徳太郎は、自身の寮歌第一作でもある「夕暮る」の作曲過程について次のように述べている<sup>6</sup>。

昼休みに歌詞の原稿を渡され、それを持って入った午後の時間が、オメガとあだ名されていた近藤先鉦太郎先生の難解晦渋の数学の時間だった。私はどうしても今もらった歌詞が気になって、オメガ先生の講義が耳に入らない。そっと原稿を出して読んでみた。第一節を読んでいるうちになにか書きとめたいような気がしてきたので、ノートに五線をひいて、心の中に浮かんでくるものを、そのまま書きしるしておいた。

この後、徳太郎は曲が短音階になってしまい、自分の憂鬱を学友に歌わせることの不安を述べている。尊敬している友人の音楽部員の片山尚に「モル（短音階）になってしまったがどうだろう」というと、「寮歌のようなものにモルはおかしいよ。そのままドゥア（長音階）にしたら」と言われたが、長音階に直すなど「金輪際できない」と考えたと、短調への拘りを述べている。さらに歌い出しのリズムが、ショパンの葬送行進曲やチャイコフスキーのスラブ行進曲に似てしまったとも言っている<sup>7</sup>（譜例1参照）。

結局、寮委員や音楽部員の応援もあり、音楽部にあったこわれたピアノで曲を披露したところ、皆が気に入ってくれて採用となった。このピアノは東京音楽学校購入第一号という楽器を貰い受けたものであった。

明治時代のナンバースクールの寮歌第一号は、作詞過程は記録があっても、作曲過程は不明なものが多い。回想録があっても、「口ずさんでいるうちに」「オルガンを弾きながら」といった即興的状況の記述である（下道：2013）。これに対し濱徳太郎の作曲過程は、1) 五線を使用、2) 調性の検討、3) 既成の芸術作品からの影響と、芸術歌曲の作曲に通じるものが伺われる。ここにきて寮歌の作曲が、新時代を迎えたと言えるのではないだろうか。

## 7 寮歌転換期としての「春寂寥」の作風

濱徳太郎は「春寂寥」の歌詞と作曲過程について、次のように回想している。

---

6 前掲書 p.62

7 前掲書 p.62

…「春寂寥」では、歌詞もまたはじめから濡れに濡れているものだったので、でき上がった曲としては、もはや白い煙さえ立たず、何とも手がつけられないほど感傷的なものになってしまった。それで作詞者の吉田実君（1 文乙）は、発表後、撤回したいという意向をしばしば持ちだしたが、寮生の諸君になだめすかされて泣き寝入りになってしまった。曲の方も発表され、歌われはじめてから、後半がどうにもじめじめとして気に入らず、いろいろ改作をこころみて、数年後の寮歌集に改作を発表してもらったこともあったが、歌われはじめてしまったものは、もはやどうにもならない。しかしそういう作者達の不満にもかかわらず、この歌も多くの学友諸兄に歌われた。

「春寂寥」は明治時代のナンバースクールの寮歌ではタブーであった「感傷的」な歌である。濱徳太郎が作曲した音楽が、この感傷的な雰囲気さをさらに盛り上げ、効果的で印象的なものになっている。そもそも旧制高等学校の寮歌は、明治 23 年（1890）の第一高等学校の短艇部の応援歌に端を発したと考えられる。そして、その揺籃期とも言える明治時代の寮歌は、日清戦争、日露戦争と勝利した世相を反映して、軍歌調のものが多い。音楽面では勇壮快活な曲調が求められ、一高、三高、六高の校友会雑誌で寮歌の音楽面の作風については論争されている（下道：2013）。

「春寂寥」は明治時代の軍歌調の寮歌と比較すると、芸術歌曲調とも言える。発表時は数字譜と言われているが、濱徳太郎が「夕暮る」の作曲過程で回想しているように、ピアノと五線譜を使用して作曲された可能性が高い。曲を分析すると以下のような特徴が考察される（譜例 2 参照）。

- 1) Andante の曲想表示がある。
- 2) 3 連符が多用され、モチーフの一つとなっている。
- 3) 6 小節 + (4 小節 + 4 小節) の 3 部分構成の二部形式 a|b a'| と考えられる。
- 4) 強弱記号を使用し、11 小節目と 12 小節目の音量の差を、明確に指示している。
- 5) 1 小節目の G → C → G の 4 度跳躍、3 小節目の G → Es の 6 度跳躍等、順次進行よりも跳躍進行を指向した器楽的な旋律である。
- 6) 後半 7 小節目の C から順次に音高をあげ、11 小節目の Es で曲の頂点（最高音とフォルテ）をおく、ドラマティックな構成となっている。
- 7) 4 分の 4 拍子で、3 連符とともに付点のリズムが多用されているが、歌われ方としては 3 連符を 2 対 1 で分割した 4 分音符 + 8 分音符であり、実態は 8 分の 6 拍子のリズム感となる。
- 8) 和声は西洋音楽理論に乗っ取った進行を有する。以下に和声分析を示す。

|       |   |       |   |       |   |       |   |       |   |       |   |
|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|---|
| 1 小節目 |   | 2 小節目 |   | 3 小節目 |   | 4 小節目 |   | 5 小節目 |   | 6 小節目 |   |
| I     | I | I     | V | I     | I | IV    | I | IV, I | V | I, V  | I |

|       |   |       |    |       |    |        |   |
|-------|---|-------|----|-------|----|--------|---|
| 7 小節目 |   | 8 小節目 |    | 9 小節目 |    | 10 小節目 |   |
| I     | V | I     | IV | I     | IV | I      | V |

|        |   |        |   |        |   |        |   |
|--------|---|--------|---|--------|---|--------|---|
| 11 小節目 |   | 12 小節目 |   | 13 小節目 |   | 14 小節目 |   |
| I      | I | IV     | I | IV, I  | V | I, V   | I |

以上のように、短調の調性、感傷的な雰囲気というだけでなく、音楽構造が西洋クラシック音楽を規範としたと考える。これは、軍歌調、朗詠調で、西洋式の和声進行による伴奏が上手く適合しない、明治時代の多くの寮歌とは一線を画する革新的な寮歌である。この寮歌の音楽的作風の転換の要因としては、松本高等学校の校風と濱徳太郎の音楽嗜好や音楽的環境の影響が多いと考えられる。

では徳太郎はどのような音楽を嗜好し、寮歌の作曲背景にはどのような音楽からの影響があったのだろうか。

## 8 濱徳太郎の収集楽譜

平成 27 年（2015）、濱徳太郎の遺族から旧制高等学校記念館に、音楽関連資料が寄贈された。楽譜資料は、手書による写譜と、購入した印刷楽譜に大別されるが、断片や歌詞だけのものもあり、数を確定するには解釈の余地がある。本稿では収集楽譜の総数は 122 点とし、手書き楽譜は 66 点、印刷楽譜は 56 点と換算した。

### 1) 印刷楽譜の概観

器楽曲は 5 曲のみで、内 4 曲がピアノ譜、1 曲がヴァイオリン譜である。日本人作曲家による器楽曲作品は山田耕筰（1886-1965）の「Variationen」（大正元年 1912）で、大正 4 年（1915）発行の雑誌『音楽第 6 巻第七号付録』である。山田耕筰作曲、北原白秋（1885-1942）作詞の歌曲が 5 曲（発行年不明）、藤井清水（1889-1944）作曲、竹久夢二（1884-1934）作詞の歌曲が 3 曲で、いずれもセノオ楽譜で発行年は大正 9 年（1920）である。他にセノオ楽譜は「ハレルヤ合唱」で大正 10 年（1921）発行がある。他には作詞は三木露風（1889-1964）や野口雨情（1882-1945）、作曲は本居長世（1885-1945）や成田為三（1893-1945）などの歌曲である。

### 2) 手書き楽譜

本稿では手書き楽譜を中心に分析するため、一覧を表 5 に示す。

## 【概要】

楽器の種別では、不明<sup>8</sup>、鍵盤楽器（大譜表）6、器楽旋律譜1、歌曲（歌詞付き旋律と伴奏）57で、圧倒的に歌曲が多い。作曲家を国内外別に見ると不明2、日本人作曲家による曲が27、外国人作曲家による曲が37である。器楽曲は全て外国人作曲家である。作曲家を個別にみると山田耕筰が18曲で最多、F. Schubert（1787-1828）が6曲で外国人作曲家としては最多、R. Strauss（1864-1949）が5曲、J.S. Bachが3曲、本居長世が4曲である。

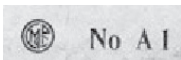
## 【年代】

日本人作曲家の歌曲の作曲年代をみると、明治43年－大正14年（1910-1925）の間に発表された作品が中心となっている。また、楽譜にメモ書きされた年代—例えば「Der Leiermann」に「1922.9.10」、「Gil n is dein Herze」に「1923 年秋」、「蟲の音」に「1922 年 10 月 29 日、青山師範付属小学校唱歌会」と記載がある—からも、手書き楽譜が書かれた年代が推測できる。

## 【五線紙】

使用した五線紙に印字された、ロゴや会社名は、表5の「紙」の列に略記号で示した。実際の五線紙に記され会社名等を表6に示す。

表 6

| 表5で用いた略記号 | 五線紙に記されていた表記やロゴ                                                                     |
|-----------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| A         |  |
| YH        | The Y.H. & Company Tokyo                                                            |
| 文房        | 文房堂                                                                                 |
| N         | NIPPON GAKKI OSAKA                                                                  |
| Bun       | Bunsedo, Koishikawa, Tokyo                                                          |
| 高井        | 高井楽器店                                                                               |
| 十字        | 十字屋楽器店                                                                              |
| 共益        | The Kyoyeki Shosha, Ginza, Tokyo                                                    |

A が最も多く使用され、次が The Y.H. & Company Tokyo であった。本稿ではこれら五線紙のロゴから、写譜の年代を特定するには至らなかった。しかし、例えば後藤は山田耕筰が多く使用した文房堂製の五線紙を刷りによって区分し、区分された五線紙群の使用年代を特定することで、山田の草稿の成立年代の推定を行っている（後藤：1984）。この

8 旧制高等学校記念館作成の曲目リストにはあるが、楽譜が欠損している。内、一曲はタイトルも一部不明である。

ような研究の手法を参考に、年代の特定は今後の課題としたい。

### 【歌詞の言語】

歌詞はタイトル、曲中の歌詞ともに、筆記体の流麗な原語で記されている。タイトルは、原語がドイツ語であっても、英語の併記があるものが多い。

また、日本歌曲に英語の歌詞をつけている作品が2曲あるのも注目に値する。「Cradle Song」は、日本古謡の「ねんねんころりよ」の旋律に、英語の歌詞をのせている（譜例3参照）。また、山田耕筰作曲の「深川」を「Hukagawa」と改題し、音楽の方は伴奏も旋律も変えずに、歌詞は英訳して各音上にのせている。唱歌等、外国曲に日本語の歌詞をのせた歌が多かったので、その逆を行ってみたのであろうか。日本歌曲や日本古謡を、外国に普及させたいという思いか、外国語が得意な旧制高校生ならではの発想なのか、日本の旋律に外国語をのせることが可能かどうかという実験的試みなのか、現段階では不明である。

### 【同じ曲を異なる調性で記譜】

山田耕筰作曲、高原正作詞の「ふえ」の手書き楽譜は、変ホ長調と変ニ長調の長2度音程異なる、二つの調性で残されている。これは、濱徳太郎が楽譜を単なる記録や資料として写譜したのではなく、実際に演奏する為に書いたという根拠となろう。曲想や強弱記号、ペダルやスラーに至るまで、調性以外は全く同じに書かれているあたり、几帳面な性格も伺われる一方で、自分用に便宜的に書いたのではなく、第三者、例えば歌手が使用することも想定していた感がある。

### 【〈Der Frühling〉と「春寂寥」】

ショパンの歌曲〈Der Frühling, In Spring〉<sup>9</sup>は、濱徳太郎が作曲した「春寂寥」とタイトルにおいて相似していることもあり、着目した（譜例4参照）。〈Der Frühling〉の原題はポーランド語〈Wiosna〉で、作曲は1838年、ショパンの遺作である。「17のポーランドの歌 Op.74」の第2曲目で、原調はト短調で書かれている。詩はポーランドの詩人 Stefan Witwicki (1801-1847) の作で、広い牧場の中で美しい自然に囲まれながら、涙にくれて悲しみを思い出すという感傷的な内容である。ショパンはこの旋律が気に入ったようで、ピアノ独奏版も作曲している。この旋律はリストも魅了し、ピアノリダクション版の「6つのポーランドの歌」(6 Chants polonaise S.480 R.145) を書いている。

濱徳太郎による写譜ではホ短調となり、歌詞はドイツ語になっている。その他は大きな変更なく書き写されている。8分の6拍子、Andantino、ホ短調のこの歌曲は、4小節からなるモチーフが2回繰り返されてテーマとなり、これがホ短調と平行調のト長調と行ったり来たりす

---

9 手書き譜にはタイトルはドイツ語と英語で併記されている。

る、単純な構造の曲である。テーマは2小節ごとに、5度音程間を山型に描くメランコリックな旋律で、この単純な山型の旋律が繰り返されることにより、不安定で感傷的な心理状態を表現している。

「春寂寥」がハ短調で Andante, 4分の4拍子であるが付点のリズムと3連符が、演奏の実際には8分の6拍子となること等、〈Der Frühling〉との共通点が見られる。何よりも、単純な構造による感傷的な表現という点が類似している。濱徳太郎は「夕暮るる」についてはショパンの葬送行進曲やチャイコフスキーのスラブ行進曲に似てしまったと自身で回想しているが、〈Der Frühling〉が「春寂寥」に何らかの影響を与えたとは考えられないだろうか。写譜の年代が特定できないこともあり、推測の域をでないが、「春寂寥」と〈Der Frühling〉の関連については、今後も調査を進めていきたい。

## 9 濱徳太郎「記譜法の改良について」

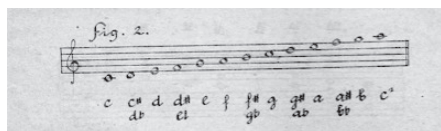
収集資料の中には楽譜だけではなく、東京音楽学校学友会発行の雑誌『音楽』に掲載された「記譜法の改良について」という小論があった<sup>10</sup>。この論考から、濱徳太郎は当時の日本の高校生としては、正に最先端の西洋音楽理論に関する見識があり、多少無謀とも思える斬新な意見を持っていたことが伺われる。

内容は五線譜における記譜法の改革案の提示である。濱徳太郎の論ずる問題点は 西洋音楽の音律である12平均律は、1オクターブ間を12に均等に分割した音程を基準としている。しかし五線譜では、この音程の幅は正確に表わされない。ドーレとミーファは、実際には音程の幅が倍違うのに、五線譜ではどちらも隣同士で書かれる。

そこで濱徳太郎は次のような改良案を論じている。

五線譜のドから順に半音ずつ記していく。

図1



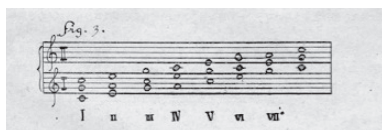
この改良記譜法により、以下の利点が得られると考えている。

- ① 現行の記譜だと長三和音も短三和音も同じ形の表記になるが、改良案だと音と音の幅が

10 濱徳太郎「記譜法の改良について」『音楽 第十二巻第四号』pp.8-15

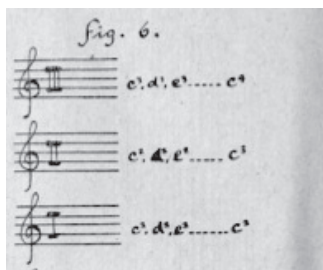
正しく示されるので、違う形になる。

図 2



- ② これにより、＃、♭といった臨時記号及び調号を使用する必要がなくなる。何調かは、譜表のはじめに基音（各調性の音階の第1音）を、長調は角張った音符で、短調は丸い音符で示す。
- ③ ヘ音記号（低音部記号）においても、音の位置はト音記号と同じになるので、読み替えの煩雑さがなくなる。何番目のオクターブなのか（同音階名の位置）は、左端にオクターブ記号（I, II, III）で記す。

図 3



この改良記譜法により、以下の不便な点を指摘している。

- ① 譜表の幅に制限があるので、オクターブ記号を用いる必要がある。
- ② ピアノ等の大譜表は、4組の譜表が必要になる。

濱徳太郎の考えは、音程を正確に記そうという、音律論が発想の基になっている。しかし五線譜は本来、演奏における実用性から発展したもので、音程間や音高を数理的に正確に表すためのものではない。徳太郎には五線譜が歴史的にどのように発展してきたかという知識はなかったのではないかと感じる。特に利点の③は、ヘ音記号の本来の意味を理解していない、不可解な論となっている。音部記号にはト音記号、ヘ音記号に加え、ハ音記号もあることを知っていたかどうか疑問である。

この小論の冒頭に、「昨年（1919）の夏に田辺尚雄に見せた」という記述がある。さらにこの小論の文末に、田辺尚雄が徳太郎の斬新な改革案に対する評を書いている。徳太郎が田辺尚雄に音楽理論等を学んでいたことを伺わせる記事である。

## 10 まとめ

寮歌「春寂寥」を作曲した濱徳太郎に着目して、西洋音楽をどのように受容してきたのか、親族の証言と、松本高等学校の史料、及び濱の収集資料から検討を行った。「春寂寥」が明治時代の寮歌の性質として忌み嫌われていた「感傷的」な歌となった背景には、濱徳太郎の音楽の嗜好や作曲への姿勢があった。しかし同時に、大正時代に入ると、明治時代に突貫で輸入し普及した「異物」の西洋音楽が、違和感のない享受可能な音楽となったことも考察された。山田耕筰らを始めとする多くの日本歌曲を残した日本人作曲家の努力により、自然な形で日本人に「西洋音楽」が浸透し始めた時期が、大正時代であったと言えるであろう。

濱徳太郎の書いた寮歌は、歌曲であり芸術作品であった。もはや明治時代の寮歌のように、護国でも時勢の批判でも校風の称揚でもなかった。作詞の意味を独自に解釈し、作曲者の芸術的な意思で再表現した作品であった。この意味ではドイツリーと作曲過程が類似している。

新しい教育理念の地名スクールである松本高等学校には、濱徳太郎のように専門的な音楽の知識や技術を持った学生達がいた。音楽部の充実した活動内容が、音楽水準の高さを物語っている。このような環境であったからこそ、松本高等学校の学生達は、「音楽作品としての寮歌」を受け入れ、愛好し、歌い継いでいったのであろう。松本高等学校の学生達が、一高を始めとするナンバースクールの伝統に捕われぬ、新しい独自の寮歌を創ろうとしたこと、それは寮歌を音楽として見なし始めた転換期とも言える。

濱徳太郎の音楽関連の収集資料は、彼の音楽への情熱の証である。流麗な筆記体で、原語による作曲家名、ドイツ語や英語の歌詞、音楽表記を綴った手書き楽譜は、幅広い教養と総合的な高い学力を持った旧制高等学校の学生だからこそ、なし得た業績である。精緻に書き写した音符の様は、掛け図を多用した旧制高等学校の理科の教育を想起させる。旧制高等学校の理科教育では、精緻に描かれた人体、植物、鉱物、機械等の掛け図を使用した。また学生達は、対象物を模写することを学習した。実験装置を様々な角度から観察し、精緻に模写することにより、その構造を理解し頭に叩き込むという教育が行われた。濱徳太郎は楽譜を写すことによって、音楽理論や音楽構造を理解し、音楽に内在する表現内容を体得していったのであろう。集められた楽譜は単なる収集家のコレクションではない。手書き楽譜の山から、真摯に、そして本格的に音楽と向き合った徳太郎の姿が浮かびあがる。

濱徳太郎は蓄音機で音楽を聴き、ピアノを弾き、合唱に参加し、音楽会を企画運営し、作曲し、楽譜を写し、そして音楽について論じた。濱徳太郎の西洋音楽の受容の様は、音楽が情報として氾濫し、高度に細分化専門化した今日の我々からは想像もできないほど、多彩で包括的であり、そして何よりも「一生懸命」なものであった。

謝辞 本論文の執筆にあたり、旧制高等学校記念館と同館の学芸員麻生沙絵様に多大なるご

協力をいただきました。ここに御礼申し上げます。

(本学准教授 = 音楽教育担当)

#### 参考文献

- 赤木顕次 1974「北大寮歌の思い出」 山口哲夫編『都ぞ弥生』（東京：東京エルム会寮歌委員会）112-114
- 荻上悦子 2008『春寂寥 旧制松本高等学校人物誌』（諏訪：長野日報社）
- 海堀 昶 2003「澤村胡夷作詞の歌 新発見 臺灣警察歌」『会報』97号 10
- 郷土出版編集部 1978『旧制松本高校青春期』（松本：郷土出版）
- 後藤暢子 1984「山田耕筰研究の現状－日本近代洋楽史研究におけるひとつの視座―」『音楽学』30/3
- 下道郁子 2014「寮歌の形成過程と文化的背景 - 『花は櫻木』から『都ぞ弥生』まで」『東京音楽大学研究紀要』第37号 25-47
- 濱徳太郎 東京音楽学校学友会 1921「記譜方の改良について」『音楽』20/4 8-15
- 樋口桜五 1974「『都ぞ弥生』のころ」山口哲夫編『都ぞ弥生』（東京：東京エルム会寮歌委員会）30-42
- 松本高等学校同窓会有志編集 2003『松本高等学校寮歌集』（松本：旧制高等学校友の会）
- 松本高等学校文芸部 1921「音楽部から」『校友会雑誌』第3号 7-9
- 松本高等学校文芸部 1923「音楽部だより」『校友会雑誌』第5号 75-78
- 矢野勘治 1983「六十年・夢心地の感慨（第一高等学校・『嗚呼玉杯』の作詞）」『資料集成 旧制高等学校全書 第六巻 生活・教養編』（東京：旧制高等学校資料保存会）
- われらの青春ここにありき編集委員会 1978『われらの青春ここにありき：松本高等学校』（松本：松本高等学校同窓会）

譜例 1

夕 暮 る へ

普通の速さで ♩ = 78 ぐらい



ゆうぐるる つかまのもりをそよろゆく



わがくれないのかんばせをわかきいのちのほこらいは



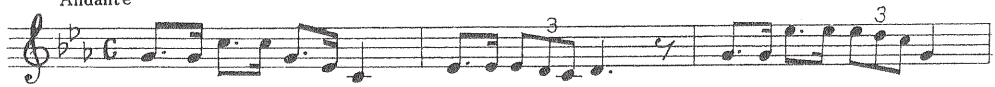
そむるひとしおしずみゆく ゆうひのはえに

『松本高等学校寮歌集』 P. 6

譜例 2

春 寂 寥

Andante



はるせきりょうの らくように むかしをしーのぶ



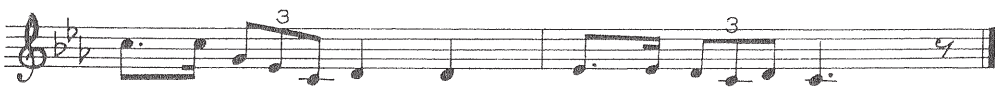
からびーとの いためるころ きょうはーわれ



ちいさきむねに いだきーつつ このはなかけに



さすらーえば あわれかーなし ゆくはーるの



ひとひらごと に ちるなーみだ

『松本高等学校寮歌集』 P. 7

譜例 3

Cradle Song.

*Quietly & solely (1-60)*

Here once lived an old man, And  
Shi-ba no O-ri-do no  
with kindest his wife  
Shi-gu-gu ya-mi For how old are they dwell lonely;  
O-ke-na ta O-gu-na ga

旧制高等学校記念館所蔵

譜例 4

Der Frühling.

*Andantino. (♩=69) In Spring Fr. Chopin*

Durch die thau-be-streu-ten wil-sen Bäu-die  
Through the dew-y val-ley mur-mur brooks me  
in-ren, Heer-den-glo-chen läu-ten  
an-drang, Bells a-tiw-klung gay-ly  
fro-Re Ler-chen schin-ren, gol-den strahlt die  
Tell where birds are wan-drang; Bright the sun is

旧制高等学校記念館所蔵

表5 手書き楽譜

| タイトル等                                        | 作曲者                      | 楽器／紙   | タイトル等                         | 作曲者                  | 楽器／紙  |
|----------------------------------------------|--------------------------|--------|-------------------------------|----------------------|-------|
| Bourree                                      | Bach                     | 鍵盤     | Cradle Song<br>(ねんねんこころよ)     | 作曲／不明                | 歌曲／十字 |
| Sarabande                                    | Handel                   | 鍵盤     | Schlacht hymne                | 作曲／不明                | 歌曲／高井 |
| Andante Favori                               | Beethoven                | 鍵盤／A   | 「ほうふらの踊り」                     | 作詞／鹿島鳴秋<br>作曲／弘田龍太郎  | 歌曲／A  |
| Canzonetta                                   | P.Tchaikowsky            | 鍵盤／B   | 「大洪水の前」                       | 作詞／有島武郎<br>作曲／近衛秀麿   | 歌曲    |
| Fugae                                        | J.S.Bach                 | 鍵盤・共益  | 「因幡の白兎」                       | 作詞／野口雨情<br>作曲／藤井清水   | 歌曲    |
| Fughett (断片)                                 | J.S.Bach                 | 鍵盤     | 「赤いくつ」                        | 作詞／野口雨情<br>作曲／本居長世   | 歌曲／A  |
| Berceuse                                     | G.Faure                  | 単旋律／A  | 「関の夕ざれ」                       | 日本古謡<br>編曲／本居長世      | 歌曲／YH |
| Chanti Hindon                                | Bemberg                  | 歌曲／Bun | 「にはとりさん」                      | 作詞／野口雨情<br>作曲／本居長世   | 歌曲／A  |
| Zwei Leichen                                 | F.Chopin                 | 歌曲     | 「春の宵」                         | 作詞／竹久夢二<br>作曲／本居長世   | 歌曲／A  |
| Rosenlieder                                  | F.Eulenburg              | 歌曲／A   | 「夕暮の唄」                        | 作詞／秋田雨雀<br>作曲／本居長世   | 歌曲／A  |
| ■■■ Tafellied                                | F.E.Fesca                |        | 「蟲の音」1922 青山師範付属<br>小学校唱歌会    | 作詞／伝田治朗<br>作曲／Herbst | 歌曲／YH |
| Fur Musik                                    | R.Franz                  | 歌曲／A   | 「青い上衣」                        | 作詞／西條八十<br>作曲／山田耕柝   | 歌曲    |
| Mephistos Serenade                           | Gounod                   | 歌曲／A   | 「風ぞゆく」                        | 作詞／三木露風<br>作曲／山田耕柝   | 歌曲    |
| Verborgene Liebe YH                          | Grieg                    | 歌曲／YH  | 「異国」                          | 作詞／三木露風<br>作曲／山田耕柝   | 歌曲    |
| Stille Nacht,Heilige Nacht                   | F.Gruber                 | 歌曲／文房  | 「ふるさとの」                       | 作詞／三木露風<br>作曲／山田耕柝   | 歌曲／YH |
| Oh,Lay thy cheek upon<br>mine own            | A.Jensen                 | 歌曲／文房  | 「すすり泣くとき」                     | 作詞／三木露風<br>作曲／山田耕柝   | 歌曲／YH |
| Der Bajazzo                                  | R.Leoncavallo            | 歌曲／A   | 「かやの木山」                       | 作詞／北原白秋<br>作曲／山田耕柝   | 歌曲    |
| Where the Four-leaf Clover<br>grow           | 作曲／Reuter<br>訳／吉丸一昌      | 欠損     | 「からたちの花」欠損                    | 作詞／北原白秋<br>作曲／山田耕柝   | 歌曲    |
| Der Asra                                     | A.Rubinstein             | 歌曲／A   | 「さすらひ」                        | 作詞／三木露風<br>作曲／山田耕柝   | 歌曲    |
| Der Page                                     | A.Rubinstein             | 歌曲／A   | 「唄」                           | 作詞／三木露風<br>作曲／山田耕柝   | 歌曲    |
| Das Rosenband                                | F.Schubert               | 歌曲／A   | 「戦後」                          | 作詞／三木露風<br>作曲／山田耕柝   | 歌曲    |
| Der Leiermann<br>「1922.9.10」                 | F.Schubert               | 歌曲／YH  | 「嘆き」                          | 作詞／三木露風<br>作曲／山田耕柝   | 歌曲／YH |
| Standchen                                    | F.Schubert               | 歌曲／YH  | 「燕」                           | 作詞／三木露風<br>作曲／山田耕柝   | 歌曲／YH |
| Aus der deulchen Messe<br>zum Sanetus        | F.Schubert               | 歌曲     | 「信仰と牢獄」                       | 作詞／三木露風<br>作曲／山田耕柝   | 歌曲    |
| Deutsche Messe Zum<br>Eingang                | F.Schubert               | 歌曲     | 「樹立」                          | 作詞／三木露風<br>作曲／山田耕柝   | 歌曲    |
| LiebLiebchen, Leg's<br>Handchen              | R.Schumann               | 歌曲     | 「ふえ」Es dur                    | 作詞／高原正<br>作曲／山田耕柝    | 歌曲／A  |
| Ach Lieblich mus nun<br>scheiden             | R.Strauss                | 歌曲     | 「ふえ」Des dur                   | 作詞／高原正<br>作曲／山田耕柝    | 歌曲／A  |
| Traum durch die<br>Dammerung op.29 No.1      | R.Strauss                | 歌曲／A   | 「Hukagawa」                    | 作曲<br>作曲／山田耕柝        | 歌曲／十字 |
| Less than the dust                           | Amy Woodforde-<br>Finden | 歌曲／N   | 「松本高等学校校歌」                    | 作詞／土井晩翠<br>作曲／山田耕柝   | 歌曲／A  |
| Till I Wake                                  | Amy Woodforde-<br>Finden | 歌曲／N   | 「春日感懐」                        | 作曲／不明<br>作詞／村上菊一郎    | 歌曲    |
| Der Fruhling                                 | Fr.Chopin                | 歌曲／文房  | 旧制高等学校記念館所蔵資料一覧をもとに<br>筆者加筆作成 |                      |       |
| Wasserfluth                                  | Schubert                 | 歌曲／文房  |                               |                      |       |
| Briet uber mein Haupt dlin<br>rehwarzes Haar | R.Strauss                | 歌曲／A   |                               |                      |       |
| Die Nacht op.10 No.3                         | R.Strauss                | 歌曲／A   |                               |                      |       |
| Die Zeitlose op.10 No.7                      | R.Strauss                | 歌曲／A   |                               |                      |       |
| Gil nis dein Herze1923 年秋                    | Hans Hermann             | 歌曲／A   |                               |                      |       |